

Ⅱ 教育実践の手引

1 教師としての心構え

1 幼児教育の意義

人間は、乳児期、幼児期、青年期を経て成人に達します。幼児期は、身体的な発達の基礎ができあがり、情緒的な発達も著しい時期です。また、行動範囲の拡大に伴って社会性も急速に発達し、日常の基本的な生活習慣が形成され、自立心が育ちはじめます。

つまり、この時期は人間の第一次の充実期で、幼児の成長のおよその方向が定まる時期です。したがって、この時期に幼児の成長発達に応じた教育を行うことは、人間形成の基礎を培うこととなります。ここに幼稚園教育の重要な意義があることを心にとめておく必要があるのです。

2 幼稚園教育の基本と目標

教育要領は総則の中で、「幼稚園教育は、幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行うものであることを基本とする」とし、特に重視して行わなければならないこととして次の3つを示しています。

- (1) 幼児の主体的な活動を促し、幼児期にふさわしい生活が展開されるようにすること
- (2) 遊びを通しての指導を中心として、ねらいが総合的に達成されるようにすること
- (3) 幼児一人一人の特性に応じ、発達の課題に即した指導を行うようにすること



そして、上記の基本に基づいて学校教育法第23条の5つの目標と関連させながら、幼稚園教育の目標を5つ示しています。

ここで、わたしたちは幼稚園教育の基本と目標に立って、幼稚園としての独自性を深く理解する必要があります。教師が幼児との信頼関係を築く中で、遊びを中心とした幼児期にふさわしい生活が展開されるにはどうしたらよいか。また、どうすることが幼児一人一人の特性に応じ、その生活経験に即した活動をさせていくことになるかを深く考え、よりよい教育環境の創造を目指して日々の教育実践に当たることが極めて大切です。

3 幼稚園教育のねらい及び内容

教育要領は第2章「ねらい及び内容」において、幼稚園教育が何を意図して行われるかを明確にしています。幼児が生活を通して発達していく姿をふまえ、幼稚園教育全体を通して幼児に育つことが期待されている心情、意欲、態度等を「ねらい」とし、それを達成するために教師が指導し、幼児が身に付けていくことが望まれるものを「内容」としています。そして、それら2つを幼児の発達の側面からまとめて5つの領域に編成しています。

各領域の「ねらい」は園の生活全体を通して、幼児が様々な体験を積み重ねる中で相互に関連しながらしだいに達成に向かうものであり、「内容」は幼児が環境にかかわって展開する活動を通して総合的に指導されなければならないものです。各領域に示されている事項は、教師が総合的に指導を行う際や環境を構成する場合の視点といえます。

実際には、日々の具体的、総合的な活動を体験させる中で、長期的な視野に立って「ねらい」が相互に関連しながら達成されるよう指導計画を立案し、実践するよう努めなければなりません。

4 幼稚園教育の全体像



5 望ましい教師

◎ かけがえのない一人一人を見つめ、道徳性の芽生えを培い、温かく導く教師になりましょう。

- ・ものごとの善悪の判断をさせるとき、単なる知識として性急に理解させるのではなく、幼児自身が体験を通して感じたり、気付いたりするように助言します。
- ・自然の美しさや身近な動植物に親しんだり、生命の大切さに気付いたり、いたわる気持ちをもつように働きかけ、豊かな心情を育てます。
- ・他の幼児とのかかわりの中で、楽しさや喜び、葛藤、挫折等を味わいながら自分や相手の気持ちに気付くようにします。
- ・日常親しく接している大人、特に教師の価値観や言動の影響を受けやすいため、教師自らの姿で良い規範を示したり、幼児の思いを大切に方向付けたりします。

◎ 一人一人を大切にされた確かな人権感覚をもった教師になりましょう。

人権感覚とは、子ども達の遊びや教師のかかわりの中で見られる何気ない言動の中に「一人一人を大切にする」という視点から「ちょっとおかしくはないかな。」「こんなことでいいのかな。」といった疑問等を持ち、その問題解決のために自分にできることは何かを考え、すぐにも行動化しようとする鋭敏な感性のことです。幼児期においては、教師が何を目指し、実際にどんなことを言ったり、行ったりしているかが子ども達に大きな影響を及ぼします。そのためには、教師自身が人権に関する重要課題等に対する関心を高め、正しい認識と理解を深めるとともに、具体的な事例から学び、常に自己点検をすることが大切です。

◎ 一人一人の違いを、幼児のもっている特性(よさ)として認め、大切にしていける教師になりましょう。



(1) 幼児の心の中にとび込みましょう。

幼稚園の教師は、幼い子が好きなことが第一です。幼児と同じ目の高さで目を合わせ、手を握って対話し、何かを訴えようとしている幼児の心を汲みとって、聞くことが大切です。

(2) 幼児の心が読みとれる教師になりましょう。

幼児は、自分の心を素直に表わせないで、泣く、黙る、乱暴するなど、いろいろな行動で表現することがあります。温かく包み、心を開いていくような働きかけをする必要があります。

(3) 幼児の生活の全てである遊びを大切にしましょう。

幼児は、自ら選んだ遊びの活動の中で、友達とのかかわりを広め、環境に働きかけるための創意工夫をこらした活動を生み出していきます。教師も、幼児の遊びの中に入り、体を通して遊びを広げていく力を育てましょう。

(4) 幼児一人一人に公平な態度で接するようにしましょう。

幼児一人一人には、かけがえのない大切な一人として「今日一日、元気に楽しく過ごしてくれるように。」との親の願いが託されています。その子なりのよさを認め、集団生活への意欲を育てていくことが大切です。一日の反省で、学級の幼児一人一人の姿が思い出せる教師になりましょう。

(5) 創造性のある生活をしましょう。

幼児期は、信頼でき憧れがもてる周囲の大人の言動を、模倣したり自分の行動にそのまま取り入れたりすることが多い時期です。それゆえ、教師自らが工夫し、創りだしていける生活態度でありたいものです。

(6) 健康で明るい生活をしましょう。

教師が疲れていたり、体の調子が悪かったりすることを、幼い子どもたちは敏感に感じ取ります。健康で明るい幼児を育てるためには、まず教師自ら健康で明るくならなければなりません。いつもにこやかでユーモアに富み、温かいまなざしで幼児に接する教師、身だしなみがよく、上司や同僚と明るい言葉を交わすことができる教師、忙しさの中にもきびきびとして能率的に仕事を処理できる教師、元気で明るい教師を目指していきましょう。

(7) 人間関係を大切にしましょう。

それぞれの教師が、個性豊かな学級の経営や指導に努めることは大切ですが、隣の学級の教師、同年次の教師、園全体の教師と協力して進めることがより効果的です。

また、保護者との人間関係も大切にしたいものです。家庭と幼稚園、特に保護者と教師とが、幼児の教育に関して方向が一致しなければなりません。幼稚園での幼児の行動を教育理論からだけで判断してしまわないで、お互いの立場を認め合い、幼児の幸せのためにという見地から、上司や第三者のアドバイスを受けて対応するようにします。謙虚で協調的な教師こそ信頼を得て、力量を高めていくものです。

(8) 実践研究の記録を大切にしましょう。

幼児を総合的に理解したり、指導の反省や指導計画の改善をしたりするために、記録をとることは大切なことです。また、記録は、自分を高め、自信をもって保育に当たることにつながります。以下は記録をとる場合のポイントです。

- ・ 幼児の行動や言葉などと奥にある心を考慮して記録する。
- ・ 観察の対象、場、目的を意図的、計画的に記録する。
- ・ 一人だけでなく仲間と共に分担し合って記録する。
- ・ 変容を捉えるために継続的に記録する。
- ・ 園内の研究や個人研修に役立てる。



2 望ましい学級経営

1 学級経営案の作成

学級経営は、幼稚園経営の一環として、園の教育目標具現のために行うものです。また、学級経営は、幼児にとって新たな生活集団として設けられた学級という場で、幼児と教師が心を通い合わせながら、その学級に秩序をつくり上げていく息の長い取組です。

学級担任は、幼児との出会いを大切に、幼児の心身の成長や発達を助けるために確かな目標と見通しをもち、指導方法を創意工夫し計画的に実践し、園の教育目標の具現を目指さなければなりません。その計画案にあたるのが、「学級経営案」です。

(1) 学級経営案の例(1年保育5才児〇〇組)

— <学級の実態> —				
<ul style="list-style-type: none"> ・ 保育所の生活を経験している子が大半を占めているので、集団生活に慣れている幼児が多い。 ・ 衣服の着脱や挨拶は、ほとんどの幼児ができるようになってきており、自分でできることが増えつつある。 ・ 活動や遊びの後の片付けについては、まだ、教師の援助が必要である。 ・ 一人一人を見ると、その子らしい発想をして遊んでいるが、仲間とのつながりが弱い。 ・ 共働きの家庭が多く、祖父母に任せる傾向にあり、母親がゆとりをもって幼児に接することが少ない。 				
— <園の教育目標> —		— <学級目標> —		
<ul style="list-style-type: none"> ・ 元気で夢中になって遊べる子 		<ul style="list-style-type: none"> ・ 自分のことは自分で行き、力いっぱい遊べる子 ・ 自然に接し、友達と仲よく遊べる子 ・ 進んでやろうとし、最後までがんばる子 		
— <学級経営の重点> —				
1 期	2 期	3 期	4 期	5 期
幼稚園生活に慣れ、教師と触れ合いながら楽しく遊ぶことができる。	片付けや自分の身のまわりの始末がしっかりでき、自分の思ったことが表現することができる。	自然のよさに親しみ、友達と一緒に遊べるようになる。	自分たちで遊び方やルールを考え、友達との遊びを工夫しながら遊ぶことができる。	友達同士でめあてをもって最後までがんばることができる。
[具体的な手だて]				
<ul style="list-style-type: none"> ・ 全員の幼児とのスキンシップに心がけ、愛情をもって接し、幼児と教師の信頼関係を築く。 ・ 幼児の興味・関心、意欲や得意とすること等を掌握し、個のよさを生かした幼児理解をする。 ・ 教師も一緒になって遊びに加わり、幼児の遊びが広がるための適切な援助をする。 				
指 導 と 評 価				
新しい教室での生活にも慣れ、新しい仲間と遊び込む姿も出てきた。その遊びが広がっていくよう環境構成や仲間とかかわり合えるような言葉かけ等を工夫していきたい。	遊んだ後の片付けを、全員でできるようにしたい。片付けの必要性ややり方などについて継続的に指導していく必要がある。片付けについては、他の学級、年次の先生方と打合せをしたい。	葉や木の実などの種類や数を豊富にした環境設定を工夫することで、形や色の違いを見付けながら、組合せを工夫して遊ぶ姿が見られた。こういった姿を認め、広めていきたい。	ドッジボール遊びでは、自分たちでルールを考え、トラブルを解決することができるよう指導・援助を工夫した。そういった仲間とのかかわりの中で、自分の思いを相手に伝えることができる子が増えてきた。	小学校入学に向けて、めあてをもって生活させる中で、互いに声をかけながら、めあてに向けてあきらめず取り組む姿が見られた。小学校生活に対する不安を解消し、期待感が膨らむ働きかけを行いたい。
— <家庭との連絡> —				
<ul style="list-style-type: none"> ・ 登降園時の保護者との触れ合いの場を積極的に生かし、相互理解を図る。 ・ 連絡帳等により、幼児の幼稚園や家庭における生活について交流をする。 ・ 園だよりや保育参加等により、園の願いや保育方針、保育内容等の理解を図る。 				

(2) 学級経営案作成上の留意点

① 学級の実態の把握

学級経営案を作成するに当たって、まずしなければならないことは、自分の学級の実態を把握することです。学級経営案の基本となる学級の実態を的確に把握するためには、次の点に留意することが大切です。

- ・赴任した日から、その幼稚園の経営方針などの説明があるので、そうした経営方針や幼稚園の教師としての自分の願い等を基に、幼児の発達段階等を考慮しながら、幼児をみる視点を明確にしておく。
- ・2年保育や3年保育の場合は、前年度までの記録をよく読んでおく。また、1年保育の場合も、園児調査票をはじめ諸調査、家庭での状況、諸能力などを幅広く理解する。
- ・幼児理解のポイントは、幼児と一緒に活動しながら、幼児を多面的、継続的にとらえ、なぜそういった姿を示すのかという内面の理解に努めることである。学級経営案作成のための学級の実態把握は、年度の初めに行うが、それを固定的なものとしめないことである。あくまで、学級経営案は、案であり、仮説である。したがって、実態の変化を捉え、学級経営案を加除修正していくことも大切である。
- ・幼児の実態をよりの確にとらえるためには、多くの教師の見方を参考にすることが必要であり、教師同士で情報や意見を交換することが大切である。

② 学級目標及び学級経営の重点の設定

学級の実態を把握したら、園の教育目標をふまえ、学級目標及び学級目標を達成するための学級経営の重点を設定します。

- ・学級目標は、園の教育目標を受けて、具体的にめざす幼児の姿になっているとよい。また、学級目標は、幼児、保護者、教師が一緒になって達成していくものであるから、お互いに共通理解し、意識しやすくすることが大切である。
- ・学級経営の重点は、幼児の発達を段階的にとらえ、具体的に評価しやすいものがよい。

③ 具体的な手だて及び家庭との連携方法の明確化

学級目標及び学級経営の重点を設定して、学級としてのめざすものが明らかになったら、そのための具体的な手だてを明確にする必要があります。

さらに、幼児の教育は、特に家庭との連携が重要であり、その方法についても明確にしておく必要があります。

具体的な手だて及び家庭との連携方法の明確化に当たっては、次の点に留意することが大切です。

- ・具体的な手だては、できた、できなかったがはっきり見届けられるものがよい。
- ・具体的な手だての内容としては、年間を見通したもので繰り返し行うものと、幼児の発達段階に応じて内容を変えていくものがあるので、意識的に区別する必要がある。
- ・家庭との連携方法としては、幼稚園での生活を保護者に伝えることと、保護者の考えを十分聞くことが大切である。幼児の生活の表れを具体的に伝えることを心がけ、保護者の考え方や意見を受け止めていくことを大切にしたい。

④ 指導と評価の記録

保育における評価には、幼児の姿の評価と教師自身の評価の二つがあります。これらの評価は、毎日の保育の中で繰り返し行われていくものですが、一年の見通しの中で今、幼児一人一人は、学級は、教師の指導はどのような状態であるのか、そして、次にどのような保育をしていくのかということを、節目、節目で見直していく必要があります。さらに、それを記録として残しておくことが大切です。そのことが、個々の幼児の成長や発達の道筋を明確にし、その成長や発達を援助し、どう保育していくのかの指針につながります。

2 学級担任としての日々の実践

(1) 教師の一日の例

時刻	内 容	教 師 の 活 動	留 意 点
8:00	出勤	<ul style="list-style-type: none"> ・「おはようございます」とさわやかに挨拶する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・元気な声で誰に対しても挨拶する。
8:30	窓あけ・清掃 出迎え 幼児の身支度	<ul style="list-style-type: none"> ・今日の計画を確認して、保育室に入る。窓を開け放ち、清掃する。 ・一人一人に声をかけながら心や身体の健康の状態を読み取る。 ・幼児が自分の身仕度ができるよう見守る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・外に出られない幼児、着替えずにいる幼児に対して個別に援助する。
9:00	遊び	<ul style="list-style-type: none"> ・幼児の興味・関心のあるものを把握し、遊びを発展させ、内容を深めていくための援助をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・幼児の意欲を大切にして遊びを援助する。 ・遊べない幼児に対して個別に援助する。
11:00	片付け	<ul style="list-style-type: none"> ・遊んだ後の片付けを自分たちでできるよう援助しながら見守る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・頑張って片付けている幼児を誉める。
11:30	給食の準備 食事	<ul style="list-style-type: none"> ・みんなで分担して給食の準備ができるよう援助する。 ・和やかな雰囲気です食事ができるようにし、マナーや偏食等、一人一人の実態に応じて指導・援助する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分たちの力でやり遂げた満足感を味わわせるようにする。 ・一人一人のつぶやきに耳を傾けながら、取組に応じて援助する。
12:30	片付け 帰りの会	<ul style="list-style-type: none"> ・ロッカーの整頓をし、帰り支度をさせる。 ・今日の宝物や友だちのよさについて交流し合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・忘れ物がないように注意する。
13:30	降園	<ul style="list-style-type: none"> ・「さようなら」の挨拶を一人一人にする。 ・交通の約束を現場で継続、指導する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・明日も元気に登園したいとする意欲をもたせる。
14:00	保育室の整理 記録	<ul style="list-style-type: none"> ・保育室を見まわり整理する。記憶の鮮明なうちに今日の記録をまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・指導・援助は適切であったか、計画的にどの幼児についても記録する。
15:00	諸会議・打合せ	<ul style="list-style-type: none"> ・今日の保育の様子を交流し合い、必要な打合せを行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・疑問点は積極的に聞く。
16:00	明日の準備	<ul style="list-style-type: none"> ・明日の保育の準備をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・今日の保育を生かす。
17:00	点検・片付け	<ul style="list-style-type: none"> ・保育室、分担箇所の点検と戸締まりをし、日直に報告する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・栽培飼育の動植物の餌や水などの確認をする。
17:30	帰宅	<ul style="list-style-type: none"> ・「失礼します」の挨拶をして園を出る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分で心身の健康を保つように留意する。

(2) 学級事務の処理

効果的な幼児の指導・援助のためには、次の表にあるような各種の学級事務がうまく処理されることが重要です。学級事務の処理能力が学級経営に大きく影響してくるといっても過言ではありません。書類の記入の仕方、備品の管理・保存の仕方等については、職員会で打ち合せ、分からない点はよく聞き、報告・連絡・相談を忘れずに責任をもってやり遂げることが大切です。各自が自分の仕事をきちんと果たすことによって、円滑な園経営を進めていくことができるからです。

学級事務の内容(概略)

指導を進める上の事務	幼児を掌握・管理する事務	園の運営上必要な事務
<ul style="list-style-type: none"> ・学級経営案の作成 ・指導計画(週案, 日案)の作成 ・環境構成に関する帳簿の管理 ・保健・安全に関する帳簿の記入と管理 ・諸行事の計画と実施 ・個人記録簿の記入と管理 ・指導要録の記入 ・家庭連絡 	<ul style="list-style-type: none"> ・入退園児の報告・転出先の確認 ・出席簿の記入と出欠席の報告 ・学級名簿等の作成 ・園児調査票, 通園路表の処理と管理 ・修了証書台帳の記入 ・事故等の処理と報告 ・安全点検 ・保育室の清掃と管理 	<ul style="list-style-type: none"> ・庶務関係(文書事務等) ・経理関係(会計関係等) ・管財(防火管理・遊具管理等) ・保健(給食衛生管理・学校医関係等) ・渉外(保護者会関係等) ・研究(園の研究課題, 自己課題についての研究)

(3) 日々の実践における留意点

新規採用の教師であってもベテランの教師であっても、幼児にとって一番大切な存在は学級担任です。学級担任としての日々の実践においては、特に、次の点に留意することが大切です。

- ・幼児の一人一人のよさをとらえ、そのよさを生かすように指導・援助し、自信をもって活動できる喜びを味わわせるようにする。そして、できた時にはみんなで認め合う場を設ける。
- ・「幼児は環境によって育てられる」と言われるが、人的環境としての教師の存在は大きいので、言動に絶えず意識して実践する。
- ・幼児のありのままの姿をとらえ、そこから一步一步前進していく姿を見守り、指導・援助していくことが大切であり、「〇歳児は、～こうあるべきだ」という固定的な見方をしないようにし、一人一人の発達段階に応じて細かく目標を立てていく。
- ・教師が環境を設定してしまうのではなく、幼児の願いを生かしながら共に環境をつくりだすようにする。
- ・特別に援助を要する幼児に対しては、学級担任だけではなく、園長、主任、他の教師にも観察してもらい、その原因を見付けて適切な指導・援助をしていく。

3 指導計画と週案・日案

1 教育課程と指導計画

幼稚園は、幼児が幼児期にふさわしい充実した生活を展開できる場として、意図的な教育を目的としています。幼稚園教育の目的、目標を有効に達成するためには、幼児の発達を見通して、発達の過程に応じた必要な教育内容を明らかにし、計画性のある指導を行わなければなりません。

したがって、幼稚園は、幼稚園教育の目的、目標に向けて、その教育期間の全体にわたって、どのような道筋をたどって教育を進めていくかを明らかにすることが求められます。そこで、各幼稚園で全体計画を示した教育課程を編成する必要があります。

(1) 教育課程の編成

3 歳 児 月	Ⅰ期 期待と不安をもちながら、次第に慣れる		Ⅱ期 先生と一緒に、好きな場所や好きな物で遊ぶ			Ⅲ期 先生と一緒に体を動かして遊んだり、好きな遊びを楽しんだりする	
	4	5	6	7	8	9	10
子 供 の 姿	<ul style="list-style-type: none"> 不安と緊張感で、泣いたり、母親と離れるのを嫌がったりする子もいる。 兄や姉のいる所で、同じようにして遊ぶ。 友達が使っている物や珍しい物を欲しがり、自分の物にならないと、泣き叫んだり、取り合ったりしてあきらめない子もいるが、他の物に目を移す子もいる。 ままごと、ブロック、砂遊びなど、経験のある遊びでは黙々と遊ぶ。 いろいろな先生を頻り、名前を呼んでもらったり、受け入れてもらったりしてうれしい気持ちになる。 自分の部屋、自分の物の置き場所を、シールで確かめながら生活する。 遊んだ後、手洗いをしておやつを食べて帰るとい生活の流れが少しずつわかる。 みんなが集まるのに、とても時間がかかるし、待つことが出来ず自分の思いで行動する。 保育者と一緒でないとトイレに行けない子もいる。 	<ul style="list-style-type: none"> 満足になって、砂や土、水を使って遊ぶようになる。 フィンガーペイント、ペンキ墨さんごっこ、泥んこ遊びなどの、ヌルヌル、ベタベタの感触遊びは好きな子嫌いな子の差が大きい。 「…したい。」「…が欲しい。」と言う要求から、物の取り合いで衝突がよく起こるようになる。 同じ場所や、同じ遊びをしている子同士が集まって遊ぶようになる。 給食は個食の着しい子が目立ち、座って食べられない子もいる。 給食が始まり、保育時間が長くなったため帰りの会で眠ってしまった、不機嫌になる子もいる。 	<ul style="list-style-type: none"> 長い休み明けで不安定になり、母親と離れることをしぶる子もいるが、遊びのきっかけをつかむと慣れるのは早い。 1学期好きだった遊びや、夏休み中に経験したことを思い出して遊ぶ。 プール遊びでは、休み中に出来るようになったことを喜んで保育者に見せる。 年中、年長児が虫を捕まえる様子を見て、タモを振り回す格好をまねて楽しむ子、虫を捕まるまであきらめず追いかける子もいる。 登る、飛び降りる、渡る、走るなど体を動かして遊ぶことが好きになる。 遊びたいように巧技台を使って遊ぶ。 友達の名前がほとんど分かり、名前を呼びあって遊ぶ。 年中、年長児の遊びに保育者が加わると、寄ってきて同じように遊ぶ。 				
ね ら い	<ul style="list-style-type: none"> 新しい環境になれ、保育者に親しみながら好きな物で遊ぶ。 	<ul style="list-style-type: none"> 幼稚園の生活に次第に慣れ、保育者や回りの友達と触れ合って遊ぶ。 自分の身の回りのことをしようとする。 	<ul style="list-style-type: none"> 幼稚園の生活のリズムに慣れ、好きな遊びを通して回りの友達と触れ合って遊ぶ。 見たことや聞いたことを保育者に伝えようとする。 				
内 容	<ul style="list-style-type: none"> 保育者と一緒に遊んだり、身の回りの世話をしてもらったりすることを喜ぶ。 ウサギやアヒルを見たり餌をやったりして、飼育動物に親しむ。 気に入った道具や場所を見つける。 戸外に出て、砂や水、固定遊具などで遊ぶ。 保育者と一緒に歌を歌ったり、絵本を読んでもらったりして、保育者に親しみをもつ。 身の回りの始末の仕方を知る。 トイレに行って用が足せる。 	<ul style="list-style-type: none"> 水、砂、土などの感触を楽しむ。 いろいろな素材に触れながら、解放感を味わう。(小麦粉、小麦粉粘土、フィンガーペイントなど) 自分の思いを自分なりに表現する。 気に入った道具、気に入った場所で遊ぶ。 保育者に手伝ってもらいながら、身の回りのことを自分でやってみる。 給食の仕方を知る。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分の思いや考えを行動や言葉で表現する。 体を動かす気持ち良さを味わう。 年中、年長組と一緒に遊ぶことを楽しむ。 秋の自然に触れたり、感じたりする。 園生活の流れを感じて、一日を過ごす。 				
配 慮	<ul style="list-style-type: none"> 不安定な気持ちに寄り添うために、その子に合ったかわりをし、安心して生活ができるようにする。 家庭で遊んでいたような物を用意し、安心して遊びが始められるようにする。 目に触れるところに飼育動物がいて、餌をあげたり、触れたりして、心を和ませていけるようにする。 戸外に出て、気分を開放できるようにする。 保育者が子供の名前を呼ぶことで、存在感が持てるようにする。 保育者に頼って来たときは、その都度その子にあった援助をしながら、安定感がもてるようにする。 保育者と一緒に歌を歌ったり、手遊びをしたり、絵本を読んだりして楽しめるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> 遊びが十分楽しめるように、裸足にさせたり、着替えを用意したりする。 身体の汚れや、お風呂に入って落とし、友達との触れ合いや、さっぱり感が味わえるようにする。 一人一人の興味や関心を大切に、自分の思いで取り組めるよう、場所、時間、物など必要に応じて用意する。 プール遊びに抵抗感を示す子もいるので、無理をしないで、他の水遊びを楽しみながら徐々に慣らすようにする。 衝突が起こったときは、双方の気持ちを十分に受け止め、伝えていく。 着替えや給食の準備など自分で出来るようにゆとりのある時間を持ち、個々に合わせて援助していく。 	<ul style="list-style-type: none"> 長い休み明けなので一人一人に話しかけたり、話を聞いたして、安定して園生活ができるようにする。 体を動かして遊びやすいように、テラスに巧技台やマットを用意し、いつでも遊べるようにしておく。 それぞれの興味関心に応じて体が動かせよう、安全面には十分注意しながら一緒に遊ぶ。 体操、フォークダンスは、木陰などの気持ちのよいところで行う。 年中、年長児のしている遊びに、保育者も一緒に参加し、ルールを知らせたり、応援したりして楽しさを共感し合えるようにする。 部屋の中でも好きな遊びがゆったりできるようにしておく。 虫とり、木の葉拾いなど、秋の自然に触れる機会を大切にす。 				

教育課程は、幼稚園における教育期間の全体を見通した計画です。幼児の発達の過程に応じて、どの時期にどのようなねらいを目指して、どのような指導を行ったらよいかを全体的に明らかになるように「ねらい」と「内容」で組織したものです。

したがって、教育課程は具体的な指導計画と密接な関係があり、指導計画を立案する際の骨子となります。

2 指導計画

教育課程の実施に当たっては、幼児の発達や生活の実情等に応じた具体的な指導の順序や方法をあらかじめ定めた指導計画を作成する必要があります。幼稚園教育の目標を達成するために、幼児にとってどの時期にどのような経験が必要かなどを見通して、指導の順序や方法についてあらかじめ予想し、計画性のある指導を行わなければなりません。

指導計画は教育課程を具体化したものです。教育課程に沿って具体的なねらいや内容、環境の構成、活動の内容、教師の援助等、指導の順序や方法を明らかにしていくことが必要です。

指導計画を作成するとき、年・期・月等の長期的な見通しをもったうえで、週・日等の具体的な計画を立てることが大切です。P 45からの例を参照しましょう。

3 指導計画の作成

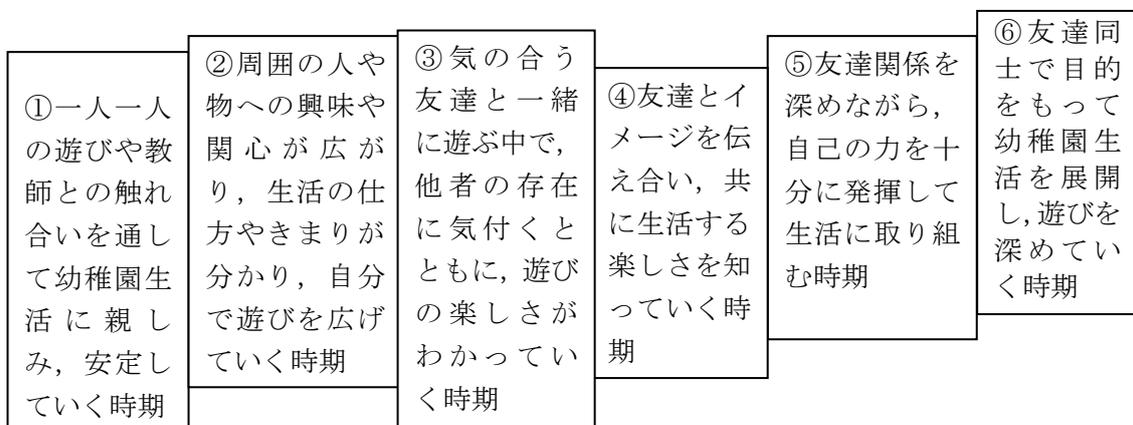
(1) 幼児の発達の過程

幼稚園では、日々の生活の中で、幼児が様々な経験を積み重ねていくことによって、幼児期に育てておきたい力が身に付くよう意図的・計画的な教育が行われなければなりません。

意図的・計画的な教育を行うためには、幼稚園の中で幼児の生活がどのように展開されていくのか、また、その中で幼児は興味や関心をどのように広げたり深めたりしていくのか、友達との関係はどのように深まっていくのかなどを捉える必要があります。

幼児の発達の過程は、次のように考えられます。

<幼児の発達の過程>



指導計画を作成するために何より大切なことは、幼児の発達の実態を捉えることです。

(2) 具体的なねらいと内容の設定

幼児の発達過程は、幼稚園生活における幼児の様相が大きく変わる節目を捉えたものです。実際の指導を行うためには、各時期に応じたねらいや内容が、幼児の姿にどのように具現化されていくかをあらかじめ考えていかなければなりません。

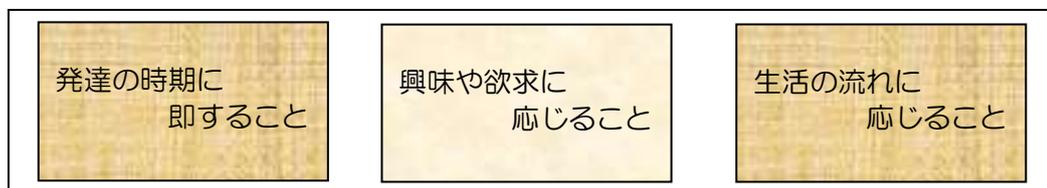
具体的なねらいや内容の設定にあたっては、長期的な見通しの中で、毎日の生活を捉えることが大切です。幼児の発達する姿を、年、期、月の期間で、ねらいや内容を想定することと、週や具体的な毎日の生活に応じて一人一人の幼児の興味や関心、発達の実態に応じてねらいや内容を明らかにすることの両面が必要です。

(3) 意図的な環境の構成

具体的なねらいを達成していくために幼児がどのような体験をすることが必要なかを、幼児の生活する姿に即して捉えることが大切です。このことは、遊具や用具等の物や他の幼児や教師などの人、身のまわりに起こる事象、時間、空間等を関係付け、幼児をとりまく環境を構成していくことにつながります。

「環境を構成する」とは、いろいろな遊具、用具、素材等を組み合わせたり、並べたりすることなど、物の構成のみを指しているではありません。環境には物や人、自然や社会の事象、時間や空間、それらがかもしだす雰囲気など、様々な要素が含まれています。そうしたものを相互に関連させながら、幼児が興味や関心に即して主体的に活動し、その活動の中で必要な体験を重ねていけるような状況をつくりだすよう心がけたいものです。

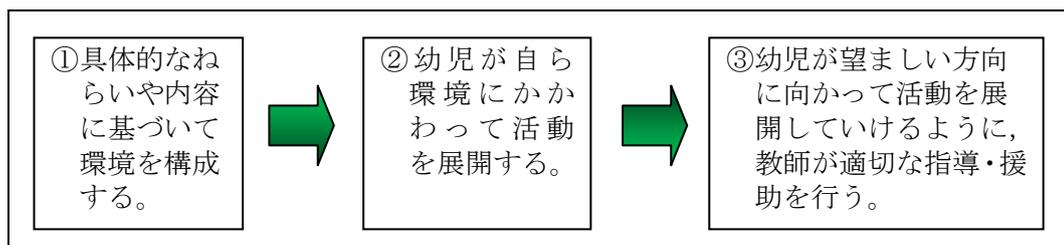
環境の構成を考えると、次の視点からどのような環境をつくりだしていけばよいかを十分に吟味することが重要です。



(4) 活動の展開と一人一人を見つめた適切な指導・援助

環境を通して教育を行うことの意味は、幼児が主体性を十分に発揮しながら生活し、幼児期に育つことが期待されるものを着実に身に付けていけるように環境を構成するということです。環境を通して教育を進めるとき、幼児が行う具体的な活動がどのようにして選択され、展開されるのかが大切になります。

具体的な活動の選択、展開は、およそ次のような過程を経て行われます。



適切な指導・援助は、ねらいに基づいて構成された環境の中で行われるものです。指導計画は、そうした環境の中で活動する幼児の様相を予想して作成されなければなりません。幼児は環境にかかわって様々な活動を生み出します。幼児の主体的な営みを大切にしながら、幼児が望ましい方向に向かって自分で活動を展開していけるような適切に指導・援助を行うことが大切です。そのためには、環境にかかわって活動する幼児の姿を予想し、どのような指導・援助が必要となるのかを考えておく必要があります。

活動の展開に応じた教師の指導・援助は、二つあります。一つは、承認、賞賛、励まし、助言などの直接的な声かけを行うことです。もう一つは、環境を再構成することです。どちらも幼児が自分で活動を展開し、ねらいを達成していけるように働きかけることが大切です。

4 園目標と週案・日案のかかわり

各幼稚園においては、幼稚園をとりまく地域の特色や環境を考慮して、幼稚園独自の園目標が立てられています。どの幼稚園でも、園目標達成のために、全体を見通し、教育内容の系統性と調和を考え、年間指導計画、月別指導計画等が立てられています。

一日一日の指導が積み重なって、園全体の教育が成り立つのですから、一日を単位とした週案や日案は大切なものとなります。

5 日案作成

幼稚園における指導計画の最小単位は日案です。各担任は「今日のねらい」を達成するために、一人一人の幼児の実態をよく把握して、「何を、どのように経験させるか」を考えながら、学級に適した日案を作成することが大切です。

日案や週案の形式はいろいろありますが、必要な項目と留意事項を述べます。

(1) 「一日のねらい」の設定

一日の指導計画作成に当たっては、特に週のねらいや内容から考えて、また、幼児の興味や関心を大切に、今日はどのようなことを主として活動させ、どんな力を身に付けさせるのかなど、その日の主な指導のねらいを具体的に明確にしておくことが大切です。

<「指導のねらい」の例>

- ・どんでんぐりで遊ぶ楽しさを味わう。
- ・感じたことや考えたことを様々な方法で表現する。
- ・社会における望ましい習慣や態度を身に付ける。
- ・自然に触れて、その美しさ、不思議さに気づき、理解する。
- ・自分の身体を十分動かし、進んで運動しようとする。



ねらいを設定するにあたり、どのように達成できるものかを考える必要があります。

①一日の活動を通じて達成できるもの	②主たる活動の中で協調して達成できるもの	③基本的な生活習慣や給食指導のように毎日繰り返すことによって達成できるもの	④一定の期間にわたって継続して指導することによって達成できるもの
-------------------	----------------------	---------------------------------------	----------------------------------

ねらいを立てるときの留意事項として、次のことが大切です。

- ①日案・週案を一緒にした形式のものを使っている幼稚園が多いです。週のねらいを決め、それを達成する環境の構成の計画を立て、幼児の活動を理解しつつ反省し、次の日のねらいを決めていく手順をふんでいます。
- ②前日の幼児の活動を振り返り、環境構成や、指導・援助の仕方を反省し、週・月等のねらいとの関連をおさえて、そこから設定します。
- ③ねらいは、具体的でよく分かるようにします。

(2) 一日の日課および幼児の活動

幼稚園では、幼児が登園して帰るまでの一日の活動すべてが教育そのものです。どの子どものびのびと楽しく活動ができるように配慮することが大切です。したがって、一日の日課は、小学校の授業のように45分ずつの単位で計画するのではなく、幼稚園の実態に合わせて、活動が展開されます。その日の主たる活動や、毎日決まってくる活動が組み合わせられた日課になります。

幼児の活動を展開するに当たって、次のことに留意する必要があります。

①幼児の動きを中心にして活動を仕組む。	②変更できるような弾力性のあるものにする。	③小学校併設の園では、互いに協調し合い、工夫して時間配分をし、主体的に楽しく活動ができるようにする。
---------------------	-----------------------	--

(3) 環境の構成の仕方

一日の指導のねらいを達成するために、幼児が生き生きと楽しい活動ができる望ましい場を構成します。用具、材料等を準備したり、器具、備品等を配置したりして物的な環境を整えるだけでなく、幼児の心をその活動に誘い込むような環境づくりを考えます。環境構成が適切なものであれば、幼児は自然にその環境の中で教師の予想した活動を楽しく展開し、ねらいの達成につながるのです。

環境を構成するときの留意事項を述べます。

- ① 幼児が自主的に活動できるように、用具、材料の種類、量、安全性を考慮し、それを使う場所、与え方など具体的に記入する。
- ② 分かりやすく図式化して記入する。
- ③ 準備は具体的に、しかも多様に行う。
 - ・木片(大・中・小の板切れあるいは木切れ、丸・三角・四角の木切れ等)
 - ・金槌(大・中・小の金槌)、釘(125mm・100mm・80mm・45mm・30mm等)
 - ・紙(新聞紙、広告の紙、色画用紙、画用紙、ワラ半紙、色紙等)
 - ・空き箱(菓子の箱、化粧品の箱、牛乳の箱、段ボールの箱)

- ④ 最初から与えすぎたり，完全なものにしたりするのではなく，遊びの進行・発展とともに，幼児自らが求めたり，考えたりするものを順次与えて，遊びの展開とともに環境を再構成させていくことが望ましい。
- ⑤ 教師は，一人一人の幼児を理解するように努め，その幼児にあった働きかけをしたり，遊びに加わったりすることが大切です。教師も環境の重要な一部です。

(4) 毎日の保育の記録

幼児の活動は，その日だけで終わることは少なく，少しずつ変化を見せながら，次の日へと続き，時にはかなりの期間にわたって連続していくことが多いものです。

そこで，幼児理解を深め，一人一人に適切な援助を行うには，毎日の幼児の活動の様子や援助を記録し，その記録を累積していくことが大切です。

記録の方法は，次のようです。

- ① 少しの量でも，毎日続けるようにする。
- ② 記録の形式は，自分が書きやすいものを工夫したい。日案も兼ねて，その日の記録と次の日の予想される活動や援助を書き込めるようにするのもよい。
- ③ 記録用紙をいつも身近に置いて，その場で活動と名前だけでも記入しておく，後で詳しく記入するときに役立つ。



子どもの姿をありのままに

行動の意味を考えて

保育者のかかわり方を
ふりかえって

記録によって，実態を把握し，考察・反省し，次の保育計画に生かすことができます。

【記録の仕方の例】

<ありのままに>

A 児が「鶏小屋の鍵をください」とやってきた。「今いくから待っててね」というと，「大丈夫，僕できるから」という。昨日は新入児に「この草，鶏もウサギも食べるよ。」と説明していた。行ってみると，「いつも A 児ばかり鍵を開けてくれる」「今日は私が開ける」などと言い争いをしていた。しばらくすると，自分たちで係を分担し始めた。

<行動の意味>

年長組になったことへの期待で胸をふくらませ，自覚や自信があらわれた姿である。前年度の年長児がやっていたことへのあこがれと，よく観察をしようとする意欲が育ってきている結果である。

どのように行動したらよいのかの見通しがもてており，問題が起こったときの解決の仕方も話し合っているように育ってきた。

<保育者のかかわり方>

子どもたちの「～したい」という気持ちを大切に，保育者が信頼して見守っているという姿を見せることによって，小動物への関心や小動物を大切にすることを育てることができると思う。自主的，積極的な姿が継続するように，えさのやり方などを少しずつ変えていく。また，任せっぱなしにしないように，見守ることを大切にする。